

[演題 8]

被災地における防災教育の現状 ～ A 高校における防災教育を事例に～

日野 詩桜里¹⁾, 石田 賀奈子²⁾

1) 神戸学院大学総合リハビリテーション学部 社会リハビリテーション学科 3 年次生

2) 神戸学院大学総合リハビリテーション学部 社会リハビリテーション学科

1. 研究の背景と目的

2011年3月の東日本大震災の時、被災地域では多くの人が指定された避難所に避難した。しかし、発達障害児については、避難所に避難せず家族とともに車中泊をしたケース、避難所でも、状況を上手くとらえられず、その場の雰囲気に適していない行動をし、避難所に居られなくなったケースも報告されている。発達障害児は環境の変化に弱く、それが重なるとストレスになる。報告者は、児童デイサービスでアルバイトをしている。一人一人、性格は様々だが、いつもと同じ手遊びやプログラムをするときは、笑顔で取り組んでいる。それは、「いつもと同じ」という今まで積み上げてきた、安心できる環境があるからである。災害は、今まで積み上げてきた「安心」できる家、友達、地域など全てを一気に失うことになる。震災から三年が経った今、子どもたちの間に震災の教訓を語り継ぐことで実践的な防災や減災の大切さを学ぶことの必要が語られる。互いに支え合う・つながることの大切さが叫ばれている。しかし、教育が必要なのは、語る力・つながる力のある子どもたちばかりではない。環境の変化に対してストレスを感じやすい発達障がい児がその輪の中に入っていくことはどれくらい想定されているのだろうか。筆者は、卒業論文では、発達障がい児への災害時への支援および防災教育に必要な視点を明らかにすることを最終目的として取り組むもので

ある。今回の報告では、その前段階として、一般の高校生・大学生を対象に取り組まれた防災教育の実際をフィールドワークで学んだ結果を報告する。なお、この研究は神戸学院大学総合リハビリテーション学会の助成金を受けて取り組んだものである。

2. 視察の概要

2014年8月10日～12日にA高校主催で実施された、「シンサイミライ学校」交流会に参加し、東北地方の高校生との交流や被災地の見学、災害発生時の体験談聴講などを行った。その中で、今回の報告では、「震災をいかに語り継いでいくか」をテーマに、参加者で行ったワークショップの結果や、ヒアリングで聞いたことを中心に報告する。

3. 成果と今後の課題

「震災をいかに語り継いでいくか」をテーマに、参加者で語り合った内容は、KJ法を参考にカテゴリを生成した。震災を次世代に語り継ぐために必要なものとして、①データ化、②様々な世代の話を聴く、③組織で取り組む、④形に残す、⑤幼児教育、⑥交流、⑦現地の人の声を聴く、の7つの概念が生成された。

今回の視察を通して、今後深めていくべき課題が2点あると考えた。1点目は、社会福祉士の存

在の浸透である。高校生たちからは、カウンセラーやソーシャルワーカーの必要性は語られなかった。これは学校教員においてもそのような語りが得られた。2点目は、発達障がい児など、公の場に参加しにくい立場にある人たちにこうした教育をどのように伝えていくかである。学校という場での網の目から落ちた場合、どのような社会資源がそれを行っていくのかを今後の検討課題とした。